

きりり! 情報局

● コロナ禍を乗り越えて ●



看護師の鈴木さん

看護師の野間さん

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年（令和元年）12月に第1例目の感染者が報告されてから、わずか数か月間でパンデミックといわれる世界的な流行となりました。東京都では患者数が大幅に増えて、入院病床のひっ迫が問題となりました。このような厳しい状況下、目黒区内で新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関として、数多くの入院患者を受け入れて治療、看護に尽力された国家公務員共済組合連合会（東京共済病院）の看護師お二人に男女平等・共同参画センター運営委員会（第16期）の委員がお話を伺いました。

鈴木さん。呼吸器病棟でキャリアを積んだ後、突然のコロナ対応を迫られた2020年4月から今年3月までコロナ病棟に勤務。

情報不足で試行錯誤の中、看護師として高いモチベーションを維持しつつ、同居家族の支えや、病院の看

護師への心遣い（「大丈夫ですか？」アンケートや、異動希望確認など）、そして何よりも、病院全体が一丸となってワンチームで乗り越えてきました。

「この目にみえないウイルスと戦った経験を活かし、新しい知識を

学び続けながら今の病院でより技術を高め、モットーにしている『患者の目・声の抑揚・触れる』をキーワードにウイルス専門看護師として、今後もキャリアを積んでいきたい。」と明るい笑顔で話をされていたのがとても印象的でした。

野間さん。東京共済病院一筋、16年間勤務。呼吸器内科などを経てコロナ病棟に1年間勤務。

「当初はコロナ病棟に勤務すること、外部との接触が制限されたり、ゴーグル着用で視野が狭くなったりするストレスなど戸惑いがありましたが、病院内での感染対策がしっかりなされていることや適切な指導によりその不安は払しょくされました。」と明るく応える野間さん。

コロナ病棟に勤務することで、皆さんや友人の家族の方から「どうしたらいい?」といった相談を持ち掛けられるようになり、コロナ禍の最前線で働くという貴重な体験から、患者さんや知人にアドバイスができ、そうした方からの「ありがとう!」の言葉が「働きがい」につなが

る経験となったということです。

男性看護師はコロナ

病棟17人中3人、全体

でも25人と少数ですが、特に男性だからといって偏見もなく、自分の仕事を全うできているというお話しでした。

取材を終えて

女性、男性とお二人のお話をうかがい、本取材を快く引き受けてくださった病院のご対応と共に、次のウイルスへ向けての対応など、変化の激しい今、各々がそれぞれのキャリアに向かって真摯に取り組む姿勢に心を打たれました。そして、お互いを尊重する風通しのよい環境がある共済病院が目黒にあることで、私たち住民も安心安全に過ごしていけると強く感じました。（取材担当 青木・大石）

きりり! 情報局は、目黒区男女平等・共同参画センター運営委員会のメンバーが取材・執筆しています。

